シリーズ われらイキイキ専修人

劇団四季俳優 大鹿礼生さん

ミュージカル『バケモノの子』で好演。俳優として新たなステージへ。

横浜市にある四季芸術センターの稽古場にて

劇団四季オリジナルミュージカル『バケモノの子』。大盛況に終わった東京公演に続き、12月から大阪公演の幕が開ける。公演に向けて本格的な稽古が始まる少し前の時期、夏の盛りに、メインキャストを務めた大鹿礼生さんを取材した。作品の主人公さながら、まっすぐで真摯な姿が垣間見えた。

おおしか らいき

1996年3月14日、神奈川県茅ケ崎市生まれ。2018年専修大学経済学部卒業。その後、研究生を経て劇団四季に入団。『リトルマーメイド』『劇団四季 The Bridge ～歌の架け橋～』『バケモノの子』『ライオンキング』に出演。趣味はギター、釣り、野球。

昨年4月から今年3月までの11カ月にわたる東京公演で、劇団四季ミュージカル『バケモノの子』は約23万8000人を動員した。主人公の蓮／九太の青年期を演じた大鹿礼生さんは公演を振り返る。

「こんなに長い期間、メインの役を演じるのは初めてでした。回を重ねるごとに、カンパニー全体の息が合って、みんなで作り上げるという感覚が日に日に大きくなっていきました」

大ヒットアニメ映画を原作としたミュージカルだ。幼くして親を失い、迷い込んだ異世界でバケモノに育てられた九太の成長、血のつながりを超えた親子の絆を中心に物語は進んでいく。

自分は一体何者なのかと葛藤する九太の心情を、大鹿さんは力強く、繊細に歌い上げ、演じた。

「この役はあなたに合ってる」と先輩に言われて受けたオーディションで、ものにした大役だったという。

「九太は自分の感性に近く、似ているところがあります。演じていて、役が自分に近づいてくるような感覚がありました」

スポットライトの世界に、再び

小学生のときから芸能事務所に所属し子役として活動していた。劇団四季のディズニーミュージカル『ライオンキング』でヤング シンバ役を演じたり、そのほか数々の舞台や映像作品に出演した。

しかし、中2のとき、一切の芸能活動をやめてしまう。「やり切ったと感じた」という。

その後は、「普通の中学、高校生活」を送り、専修大学経済学部に進学した。

↑子役として活動していた
小学校時代
→大学卒業時、黒門の前で

↑『バケモノの子』東京公演（撮影：阿部章仁）

高校と大学ではバンド活動もしていたが、「本当にやりたいことがみつからなかった」。そんなとき、子役時代の事務所から声がかかり、舞台の裏方として手伝うことに。

「やっぱり舞台って面白そうだなって思いました。大きなホールで、スポットライトを浴びて、音楽が流れて、自分はここが好きなんだと」

大学２年から再び舞台に立ち始めた。

経済学部では室井義雄教授（現専修大学名誉教授）のゼミに所属したが、そこの仲間たちは、勉強だけでなく、サークル活動や旅など、好きなことに一生懸命だった。そして、大鹿さんにとって、一生懸命になれるものは舞台だった。

進路に悩んだとき、室井先生に相談すると言われた。「好きなことをやりなさい」。その言葉に背中を押された。

オーディションを経て、研究生として劇団四季に入った。歌やダンス、芝居を基礎からしっかりと鍛え上げた１年間の研究生生活を経て、2019 年に正式に入団を果たした。

よりスケールアップして、大阪で開幕

12 月 10 日（日）から６カ月近くにわたる大阪公演が始まる。

「東京公演がよかったからといって、それをなぞらず、みんなで意見を出し合って、よりよいものに仕上げたいと思っています。新しい作品を作るつもりで頑張りたいです」

俳優同士の掛け合いや観客の反応など、一度として同じ舞台はない。ときとして仲間の支えを受けながら、東京公演では全力で演じ切ることができたと思っている。

〈忘れないで、私たち、いつだって、たったひとりで戦ってるわけじゃない〉

九太に新しい世界を教えてくれる少女、楓は言う。

舞台上でのセリフだが、まるで大鹿さんへのメッセージのようにも聞こえる。

「みんなで一緒に育てた作品です」

と大鹿さんは胸を張る。

劇団四季オリジナル作品の初演としては最長公演期間と最大動員数を記録した『バケモノの子』。壮大なスケールの舞台が、大阪で再び幕を開ける。一段と輝きを増した大鹿さんの姿が見られるはずだ。